

「おばあちゃんのみみつ」

袋井市 澤根 孝浩

うちのおばあちゃんは元気だ。すつこく。ぼくや、お父さんもお母さんよりも元気。声は大きいし、よくしゃべる。おもいものだつて、かんたんにもち上げるし、かけっこだつて速い。くやしいんだけど、うでずもうや、かけっこで、ぼくはおばあちゃんに勝ったことがない。

ある日、ぼくは思ったんだ。おばあちゃんには、ひみつがあるんじゃないかって。そう、元氣のみみつ。

じつは、おばあちゃんは本当はもつともつとわかいないじゃないかな。ううん、もしかしたら、ふつうの人間じゃないのかも。なぞの研究室で、かいぞうを受けたスーパーおばあちゃんかもしれない。

お母さんたちも知らない、すごいひみつがあるのはまちがいない。

そんなこと考えたら、もうがまんができない。ぼくは、そのひみつをさがすことにした。知ってる？ ひみつを見つげる人のこと。たいてい「って言うんだよ。」

朝から、おばあちゃんを「ちょうさ」することにした。ちょうさ、って、かっこいいでしょ？ ちょうさ、っていうのはね、おばあちゃんに気づかれないようにひみつを見つげることなんだ。

ちょうさがうまくいけば、おばあちゃんが、けいたい電話みたいに「じゅうでん」してるところを見つげちゃうかもしれない。

こわいような、わくわくするような気持ち。おばあちゃんは、朝六時に起きる。早起きなんだ。いつもはねぼうなぼくも、今日は、ふとんからもぞもぞと出た。

おばあちゃんは、ごはんの前にコマメのさへんぼに行く。コマメっていうのは、ゴルデンレトリバー、っていうしゅるいで、名前とは違ってとっても大きい。だから、ぜんぜん、ちいさなお豆じゃない。

それでも、おばあちゃんは、コマメに負けたくない。好きな方へ行こうとするコマメの、さんぽひもをぐつと止める。コマメはいつもそのたびに「あれ？」って顔をする。

帰ってくるころには、コマメの方がせえせえ言っている。今日はぼくも同じだ。でも、おばあちゃんは、どうってことない顔をしている。ふんふんふん、へんな歌を歌ってる。

さんぽが終わると、朝ごはん。おばあちゃんは、しゃんとしたしせい、ごはんを食べる。ゆつくり、ゆつくり。もぐもぐもぐ…もぐもぐもぐ…ごくり。

僕もまねをしてみる。もぐもぐ…ごくり。あれ？ もう一回。もぐもぐ…ごくり。あれ？ やっぱりうまくいかない。いつのまにか、ごくりと口のなかの食べ物はおなかにおっこつていつちゃう。なんで、おばあちゃんはあるにながくかんでいられるんだろう。

そうやって、ふしぎそうに、おばあちゃんの顔を見ていたら、おばあちゃんに気づかれちゃった。

「何を見てるんだね？ たかしは」

「なんでもないよ」

ぼくはそう言つて、知らん顔したけど、しんぞうはどきどきしていた。

「おかしな子だね」

おばあちゃんが言ってるけど、気にしない、気にしない。たんていは、ちょうさしていることをばれちゃいけないんだよ。

こつそり、こつそり。

おばあちゃんが、やつとごはんを食べ終えて、ずずつとお茶をのんでいる。これもゆつくりだ。おばあちゃんの元氣のみみつは、もしかして、ゆつくりなこと？

いやいや。まだきめつけちゃいけない。これ

も、たんでいの「ルール」なんだ。すぐにきめつけない。じっくりかんさつして、しょうこを見つげるんだって。あれ？ しょうこってなんだろう。

いつのまにか、お茶をのんでいたおばあちゃんがいない。どこに行っちゃったんだろう。ぼくはあわてて、探しはじめた。でも、すぐに見つかった。せんめん所だ。歯をみがいている。ぼくは、しばらくせんめん所の外からながめていた。

まさか、ここにひみつはないだろうけどって思いながらね。ごしごしごし…きゅっきゅつ…前、右おく、左おく、歯ブラシがまるでおどつてるみたいに動いている。前に、おくに、うらがわりに、やさしく、おどっている。ぼくのみがき方とはぜんぜんちがう。

前に、おばあちゃんがぼくのみがいているのを見て、そんな力をいれなくても良いんだよって言ったのを思い出した。それと、ていねいに、時間をかけてみがきなさいって。

なかなか終わらない。ごはん食べるのも、お茶をのむのも、歯をみがくのも、ゆっくりだ。

やっぱり、「ゆっくり」なのが、おばあちゃんのみみつなのかな。でも、ゆっくりが元気のひみつなんて、ぼくにはわからない。

もうつかれちゃったし、今日のちようさを終わりにしようかなあ。うつん、だめ、だめ。おばあちゃんがせんめん所から、歯をみがきながら、ぼくを見た。

目がなにやってるの？」って言っている。ぼくはあわててかくれた。

せんめん所から見えないドアのうらでかくれていたから、ごろごろペ、っていう音が聞こえてきた。おばあちゃんの口をすすいでいる音だ。もうすぐ出てくると思って、ぼくは何でもないように、リビングに行った。知らん顔して、テレビを見る。

少ししてから、おばあちゃんもやってきた。ぼくのことを後ろから見ているような気がし

て、どきどきしていた。

「あつ」と、おばあちゃんが言った。

ぼくはその声におどろいて、はねあがりそうだった。

「今日は歯医者さんに行かなくちゃいけない日だったねえ」。歯医者さんっていう言葉を聞いて、ぼくはもう一度、はねあがりそうになった。

だって、ぼくが一番、苦手な場所なんだもん。おばあちゃんは、そんなぼくのことなんて気にしないで、自分の部屋に行った。

ぼくは、テレビを見ていた。見ていたけど、見えない、そんな感じ。もしかして、おばあちゃんはこれから歯医者さんに行くのかなと思うと、落ちつかない。もちろん、ぼくはたんでいたから、後ろについて行かなくちゃいけないんだ。

よしっと思っても、すぐに心がふにやふにやふにやっつてなる。はずかしいけど、ぼくは歯医者さんで泣いてしまったことがあるんだ。

それから、歯医者さんの前を通るだけで、泣きそうになっちゃう。

おばあちゃんがよそいきのかっこうになって、部屋から出てきた。

「たかし、もう歯をみがいたかい？」

「うん」

って、答えたけど、たんでいでいそがしく、まだみがいてない。

「歯医者さんに行ってくるからね」
やっぱりだ。

「おばあちゃん、むし歯になったの？」

「ちがうわよ。今は大丈夫でも、ていきできに歯医者さんにみてもらうことが大事なの」

おばあちゃんは、そう言って、げんかんに行った。むし歯でもないのに、歯医者さんに行くなんて、ぼくにはぜんぜんわからない。

むし歯になっても、できれば、行きたくない。

そんな風に思っていると、がちやりとげんかんが開いた音がした。おばあちゃんがでかけたんだ。

まよったけど、ゆうきを出して、追いかけることにした。

おばあちゃんは、食べるのも、歯をみがくのもゆっくりだけど、歩くのは速い。ぼくが外に出ると、もうどっちに行つたかわからない。でも、行くところはわかっている。うちは、みんな、同じ歯医者さんつて決まっているから。それに、行くまでの近道もぼくは知っている。

近道をぬけて、歯医者さんの前。おばあちゃんちがちょうど歯医者さんに入るところだった。ぼくは、そのままそこで、おばあちゃんが出てくるのをまつことにした。どきどきしているのは、走ってきたからじゃないし、たいていをしているからでもないよ。歯医者さんの前だからだ。

三十分くらいまっていると、おばあちゃんが出てきた。本当はかくれていなくちゃいけなかつたけど、三十分もまつたから、ぼくは「ゆだん」してんだ。

おばあちゃんは、はつきりぼくを見ていた。そして、大きな声で言った。

「たかし、何してんの？」
「ぼくはしかたなく、おばあちゃんのところへ行つた。」

たんていは、本当はあきらめちゃいけないんだけど、もうだめ。へとへとだ。苦手な歯医者さんの前で三十分もまつたんだから。

「おばあちゃんの元気のひみつをちょうさしていたんだ」

ぼくが言うと、おばあちゃんはきよとんとした顔をしてから、がははって、大きな声で笑つた。

「おばあちゃんの元気のひみつ、教えて」

「ちょうさしてたんじゃないの？」

「ちょうさしたけど、ぜんぜんわからなかつたんだ」

「ふうん。じゃ、そのちょうさしたこと、教えてごらん」

「いいよ。おばあちゃんは早く起きて、コマ

メのさんぽをする」

「それから？」

「ゆっくりごはんを食べて、ゆっくりお茶をのんで、ゆっくり歯をみがく」

「よく見るじゃないの」

おばあちゃんがかんしんしてる。

「それから、歯医者さんに行つたんだ。…これがぼくのちょうさだよ」

「ひみつはわからなかつたの？」

「うん。ぜんぜん」

ぼくはそう言うと、おばあちゃんは、また大きな口を広げて、がはははと今日でいちばん大きくわらつた。

わらつた口には、きれいにならんだ歯が、きらりと光つた。

「ひみつは、これだけよ」

と云つて、おばあちゃんは、その歯を指さした。

「だから、たかしもちょうさするより、ちゃんと、ていねいに歯をみがなくちゃいけないよ」

おわり